

# Try①

氏名	
年 月 日	得点
問 / 8問中	

☀ 次の文章は、「人間はどこまで動物か?」という問いかけについて述べたものである。これを読んで、あとの問いに答えなさい。

たしかに人間は他の動物とは違う。けれどイヌだって他のすべての動物と違う。ゾウもキリンもそうである。だからこそわれわれはゾウやキリンやイヌを認識できるのだ。<sup>①</sup>動物どうしの間のこの「違い」と、動物と人間との「違い」との間に、どのような違いがあるのだろうか。

問題は「人間はどこまで動物か?」という問いかけの中にある。「どこまで?」というとき、スケール(尺度)は一本しかない。<sup>②</sup>一本しかないスケールの上にいるいろいろなものを並べて、それぞれがどこまで到達しているか? という発想に問題があるのである。

アメーバに知能はない。昆虫にもほとんど知能はない。しかしカラスにはかなりの知能があるようだ。ネコやイヌになるともっと知能が発達している。チンパンジーはすばらしい知能の持ち主だ。しかし人間はもっとすごい。格段に進んでいる——というように一本のスケールの中で比べていく発想だと、どうしても「どこまで」を問いたくなる。

イヌとネコは同じ食肉類のけものである。しかし人は、「イヌはどこまでネコか?」という問いを発することはできない。それは人々が無意識のうちに、イヌとネコはまったく違う動物であることを知っているからである。この違いは同じスケールの上でも「どこまで」の違いではなくて、いう

なればベクトル(方向)ないしパターンの違いである。たとえば、イヌは群れを作って遠くまで歩きまわりながら獲物を追いかけるようにできた動物だ。彼らにとって歩きまわったり追いかけることは苦痛ではなく喜びである。だから飼い主はどんな雨降りの日にもイヌを散歩に連れていかなければならない。一方ネコはそう遠くまではいかず、獲物の存在を察知したら、気づかれぬようにじっと待ち伏せるようにできている。だからネコを散歩に連れ歩く必要はないし、そもそも本来的に無理である。

動物行動学の研究が示してくれたのは、どの動物もそれぞれの個体が自分自身の子孫をできるだけたくさん後代に残そうとしていることは同じだが、そのやりかたは種によってまったく違うということである。

イヌはイヌなりの、ネコはネコなりの、そしてゾウはゾウなりのやりかたで生き、それぞれに子孫を残してきた。自分自身の子孫を残すという点ではまったく同じだが、そのやりかたはまったく違うのである。同じスケールの上で、どれがどこまで、という問題ではない。<sup>③</sup>「ゾウはどこまでライオンか?」という問いは存在しえないのである。そしてそのことはだれでも ④ のうちにちゃんと知っている。

それなのに人は、なぜ「人間はどこまで動物か?」と問いつづけるのだろうか? そこには常に一本のスケールの上での到達度を問題にしようとする近代の発想の呪縛があるようにしか思えない。

ひだかとしたか  
(日高敏隆『人間はどこまで動物か』より)

\*動物行動学:生物学の一分野。人間を含めたすべての動物の行動を種の進化の問題としてとらえて研究する学問。

呪縛:心理的に束縛そくばくすること。

問1 ——線①「動物どうしの間のこの『違い』と、動物と人間との『違

い』との間に、どのような違いがあるのだろうか。」とあるが、この問いかけに対して、筆者自身はどのように答えると思われるか。次の空欄に当てはまる一語を、文章中から抜き出しなさい。

人間も含めた動物どうしの違いには  の違いがあるだけで、この二つの「違い」の間には本質的な差は存在しない。

[ ]

問2 — 線②「一本しかないスケール」について、次の問いに答えなさい。

(1) この「スケール」には、どのような特徴があると言えるか。適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 平等主義的な発想。
- イ 動物行動学的な発想。
- ウ 人間中心主義的な発想。
- エ 動物の個体を重視する発想。

(2) 筆者がもし「スケール」を認めるとすれば、それはどんな「スケール」かを示唆的に示している段落を探して、その段落の初めの五字を書きなさい。

問3 — 線③「ゾウはどこまでライオンか？」という問いは存在しえないのである。」について、次の問いに答えなさい。

(1) 筆者がここで「ゾウ」と「ライオン」を挙げていることについての説明として適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア いわば筆の流れであって、どんな動物でも差し支えない。
- イ 形態や生活の仕方が極端に異なる動物どうしである。

ウ どちらも多くの人にとってなじみ深い動物である。

エ 互いに知能の点で人間に近い進化を遂げている動物である。

(2) このような問いが「存在しえない」理由を、簡潔に書きなさい。

[ ]

問4 ④ に当てはまる二字の言葉を、文章中から抜き出しなさい。

問5 — 線⑤「近代の発想の呪縛」とあるが、この例として適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 人間は人それぞれに、さまざまな生き方を追求している。
- イ 国際社会で先進国、発展途上国という区別がまかり通っている。
- ウ 通信手段の発達によって、情報が手に入れやすくなっている。
- エ あらゆる文化はみな、独自の歴史性と固有の体系とをもっている。

問6 この文章の要旨として適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 人間が他の動物と違う点を鮮明にするべきである。
- イ 人間を含めた動物の生命活動の目標は、子孫の維持である。
- ウ 人間と他の動物とを単純に比較するのは無意味である。
- エ 人間は他の動物の中に、自身の本来の姿を探している。

解答・解説

Try



問1 種

問2 (1) ウ (2) この違いは

問3 (1) ア

(2) (例)ゾウもライオンも別の種として、それぞれの生き方をし  
ていて、同一のスケールで比較するのは無理だから。

問4 無意識

問5 イ

問6 ウ

**解説** 《筆者と出典》 日高敏隆ひだかみしたか（一九三〇年生まれ）は動物行動学者・昆虫学

者。日高敏隆は、『動物にとって社会とはなにか』（講談社学術文庫）という著書の書き出しの部分で、「人間とは人間ぜんたいをさすことばであること、そして、人間が動物の一種であること——これはだれでも知っている。では、動物の一種であるというのとは、どういうことなのか？ 問題はここからはじまる。」と述べている。この本が出版されたのは一九七七年のこと、出題の文章が収められている『人間はどこまで動物か』（新潮文庫）が出版されたのは二〇〇六年である。右の引用部分と出題文とを読み比べてみても、「動物について研究しながら人間について考える」という筆者の姿勢が一貫していることをうかがい知ることができるだろう。出題の文章は『人間はどこまで動物か』に収められている「人間はどこまで動物か」という文章の後半部分である。

問1 ——線①の文の「……か。」という表現の仕方は、疑問ではなくて「…

…か。いや、違いなどない。」という反語の表現だということに注意する。  
——線①で示されている筆者の考え方について結論的に述べているのは、次に引用する、本文の最後から三つ目の段落である。

動物行動学の研究が示してくれたのは、どの動物もそれぞれの個性が自分自身の子孫をできるだけたくさん後代に残そうとしていることとは同じだが、そのやりかたは種によってまったく違うということである。

人間もちろん動物なのだから、人間も含めた動物どうしの間にある「違い」は「種の違い」だけだ、というのが筆者の考え方である。

問2 (1) ——線②の部分を含む段落の次の段落に注目する。そこには、次のように書かれている。

アメーバに知能はない。昆虫にもほとんど知能はない。しかしカラスにはかなりの知能があるようだ。ネコやイヌになるともつと知能が発達している。チンパンジーはすばらしい知能の持ち主だ。しかし人間はもつとすごい。格段に進んでいる——というように一本のスケールの中で比べていく発想だと、どうしても「どこまで」を問いたくなる。

ここで筆者が述べているのは、「アメーバから人間まで」という言葉に代表されるような単純な進化の考え方による、人間が進化の頂点にいるという考え方にもとづいた「スケール」のことで、もちろん筆者はこのような人間中心主義的な「スケール」を批判している。したがってウが適切。

(2) 第五段落の冒頭の、「この違いは同じスケールの上でも『どこまで』

の違いではなくて、いふなればベクトル(方向)ないしパターンの違いである」という部分に注目する。筆者が批判しているのは、人間中心主義的な「一本しかないスケール」なのであって、動物の多様性に見合った「スケール」はあってもよいということになる。

問3

(1) 第四段落に『イヌはどこまでネコか?』という問いを発するのではない。とある。要するに、この問いの形は、たとえば「ネズミはどこまでネコか?」「カエルはどこまでヘビか?」などでもいっように構わないということになる。したがってアが適切。

(2) 問1で考えたことを思い出す。キーワードは「種」である。動物が「種」によって、それぞれの作法で生きているのだとしたら、違う「種」どうしの動物を比べるには意味がないというのが、筆者の考え方である。

問4

第四段落に「それは人々が無意識のうちに、イヌとネコはまったく違う動物であることを知っているからである。」とある。人間が動物であるからかどうかはいざ知らず、人は本来的には、人間が他の動物と同じ生き物であることを知っており、したがって、イヌとネコがまったく違う動物であることもわかまえてはいるはずだ、というのである。右の引用部分に含まれている「無意識」という言葉が、④に当てはまる。

問5

「近代」という概念をどのように定義するかは、それぞれの考え方によって異なってくる。さまざまに異なった「近代」観をまたぐようにして共通している認識は、「近代が、産業の発達によって多くの地域が都市化している時代であり、また資本主義の市場原理によって、効率と競争が前面に出ている時代だ。」ということであろう。動物界の中で、人間を中心に置こうとする人間中心主義も、やはり「近代」の発想であり、この発想からさまざまな「差別」「分類」が生まれてきているのである。出題

文の直後の部分で、筆者は次のように記している。

考えてみれば国際関係でいつも使われる先進国、発展途上国ということばにも、大学受験の偏差値という概念にも、近ごろ新聞に大きく報道された上位三〇校の大学などという表現にも、それが如実に表れているのではないか。

\*「それ」は、「近代の発想の呪縛」を指している。

右の線部が、選択肢のイの内容と同じである。

他の選択肢を検討する!

ア↓これは「競争原理」とは正反対の発想である。

ウ↓「情報」が多いこと自体は、多くの人にとって歓迎すべきことである。

エ↓これはイと対立する考え方である。

問6 本文の最後の段落に、「それなのに人は、なぜ『人間はどこまで動物か?』と問いつづけるのだろうか?」とある。明らかに筆者は、人間を中心に他の動物たちを理解しようとするをやめるべきだと述べている。「人間はどこまで動物か?」という問いかけに含まれている誤った認識を、筆者は批判しようとして、この文章を書いているのである。したがってウが適切。